

留学報告書 ～フィリピン大学中期留学を経て～

フィリピン大学
外国語学部生（中期）

私にとって中期留学は新たな経験への一歩であり、そこには期待と現実の対峙が待っていました。

高校卒業後、海外進学を予定していました。しかし、コロナウィルスの影響により渡航は中止になりました。名古屋学院大学に入学し3年が経ち、高校生の頃とは違う行き先ではあるが、夢の留学に期待していました。予想はしていましたが、留学前の日本の大学生活と、フィリピンでの大学経験とのギャップは大きく、留学生活は新しい環境への順応と試練の連続でした。また、2023年の2月に参加した1ヶ月の短期留学でフィリピンに行った際に、充実した生活を送れたことから、新しい環境に対して楽観視していました。一時期は、問題があった際の状況や対処を経て病んでいました。また、気候や食中毒により体調を崩していました。しかし、文化や生活スタイルの変化がもたらす苦労や、学びの場での充実感、何より良い友好関係を築いてくれた周囲の人々が思い返すと私の留学体験を彩ったと感じています。

日本の大学とフィリピンの大学とでは、異なる雰囲気が漂っていました。留学したら誰もが感じるであろう「留学生活の憧れと現実」が、私にも実感しました。フィリピン大学は、学位授与数、学生数、教員数、図書館資料数など様々な事において、最大のキャンパスです。敷地面積は493ヘクタールの広大な土地が広がっています。キャンパス内を移動するには、ジプニーを使います。ジプニーとは乗合バスのような乗り物です。暑い日差しが照りつける中、歩いて移動するのは大変なので、ジプニーは大切な移動手段とされています。ちなみに、留学期間中に2度、ジプニーの運転手によるストライキが行われました。政府がジプニー廃止案を提案した為です。大学内の中心にはサンケンガーデンという大きな庭があります。サッカーやバドミントン、コンサートなども行われる大きな規模の庭です。周りはアカシアと呼ばれる品種の木が植えられており、木陰では日向ぼっこをする人や、食事をする人、話に花を咲かせる人たちでにぎわっていました。これらのフィリピン大学の環境は、予想外の出来事と共に日々進行していく中で、留学生ならではの成長と新たな発見が待っていました。

授業においては、LIS (Library and Information Science) の講義が特に印象的でした。情報の生成や蓄積、社会調査に基づく研究まで、多岐にわたる領域を学ぶことで、授業を通じて得た知識は実践的で幅広いものばかりでした。この授業を通じて学際的な学びが広がり、自分の視野を広げることができました。特に、現地の学生との交流や共同プロジェクトが、留学先での学びをより深化させました。フィリピン大学のどの授業にも共通することに、ディスカッションやプレゼンテーションなど学生が中心となって進める事があります。この授業では特に、教授が問題定義をし、それぞれの生徒が考えた後に、ペアワークやグループワークに取り組む事が多かったです。主体性が求められる授業は参加していて有意義な時間になりました。また、教授が教室で唯一の留学生だった私を気遣い日本の情報を混ぜて授業を行ってくれるなど、優しさを感じました。

Creative Writing (CW) では、アカデミックなライティングを超えて、フィクションの創作にも挑戦しました。ただ直訳しても分からない文章を読み進めることは時に困難でした。しかし、メタファーを扱った章では、私の専攻するゼミの内容と重なる部分があった為、深く授業を受講する事ができました。この授業では、言葉の違いを乗り越えて新たな表現方法を学ぶ契機となりました。また、クリエイティブな力を伸ばすことができました。授業の最後には、留

学生として独自の視点を生かし、ノンフィクション作品を通じて自分の国の文化や習慣を紹介しました。私は、成人式、着物、などの日本の文化と、自分が当時感じた事を作品に含めました。作品を作る過程で、親や友人などの、味方でいてくれる人達の大切さを改めて感じる事ができました。

また、FN (Food and Nutrition) の授業では、食事や栄養に関する理解を深めました。難解な内容にも理解するために必死に授業に喰らいつきました。留学先での食文化に触れる中で、新たな視点を身につけました。授業の一環として、地元の市場や食堂を訪れ、異国の食材や調理法に触れることで、言葉だけでは理解できない地元の食生活習慣を学びました。留学前の日本での食事環境との対比が、栄養学の枠を超えた貴重な体験となりました。しかし、以前から文系専攻の私にとって、理系の内容や実験はとても難しかったです。それでも、クラスメイトが丁寧に分からない所を教えてくれたお陰で、提出物や小テストはクリアできました。

留學生活において、学校外での生活もまた大きな思い出となりました。初めて訪れた大学内の施設が期待を下回り、食事やフィットネスジムの環境が厳しかったことに戸惑いましたが、そこから生まれる新たな発見や経験が、留学の真価を示しました。特に、フィットネスジムでの日常が留學生活を助け、新しい友人や自己規律の向上をもたらしました。フィットネスジムでのクラス参加を通じて新しい友人を得たり、自己規律を養ったりする中で、留学先ならではの挑戦がありました。運動を通じて言葉を越えたコミュニケーションが可能であり、異なる文化背景を持つ仲間と共に運動することで、留学先での絆が深まりまったと感じています。これらの挑戦が、単なる学問的な側面を超え、留學生活全体において私の自己成長を促進しました。

また、セブ島での旅行は特に印象的でした。美しい海でのウォーターアクティビティーや、地元の美味しいマンゴーやレチョンに触れ、フィリピンの魅力を存分に堪能しました。セブ島の青い海と美しい自然が、留學生活の中でのリフレッシュの場となりました。また、地元の人々との交流を通じて、言葉だけでは理解できないフィリピン文化の深さに触れ、異なる価値観を理解することができました。セブ島での体験が、留學の中で安らぎを感じた時間になりました。

留學を通じて得たものは計り知れません。自分自身がどれだけ成長できたかを振り返ると、留學は非常に有意義なものであったと感じます。新しい環境での苦勞や挑戦は、結局のところ自分を知り、向上させるきっかけとなりました。留學から帰国した今でも、その経験が私の人生に大きな影響を与えており、留學して良かったと心から思います。留學は単なる学問以上のものであり、人生において貴重な体験でした。学体験が私にもたらしたのは、新しい知識だけでなく、異なる文化を理解や、人間関係、成長する力など言葉では書き切れない程あります。この貴重な経験を胸に、これからも留學生活で得た価値を大切に、未来に向かって進んでいきたいと思っています。